

# ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築における貢 献ー国会議事堂の建築金物を事例としてー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東北学院大学学術振興会 公開日: 2025-01-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大門, 耕平 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000419">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000419</a>

## ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築における貢献

### 国会議事堂の建築金物を事例として

#### The Architectural Contributions of William Merrell Vories A Case Study of the Hardware in the Japanese National Diet Building

○大門 耕 平 \*1

○Kohei OKADO

**Abstract:** This study focuses on the architectural hardware business of Omi Sales Company (OSC), which began with the hardware for the Japanese National Diet Building. The purpose of this study is to highlight the contributions of William Merrell Vories, a significant figure in the modernization of Japan through architecture, education, and business, specifically in the field of architectural hardware. This investigation revealed that Omi Sales, founded by Vories, was responsible for the architectural hardware of the Japanese National Diet Building. The original hardware's condition at the time of construction and its current state in the National Diet Building have been clarified.

**キーワード:** ウィリアム・メレル・ヴォーリズ、建築金物、OSC 製建築金物、国会議事堂

**Keywords:** Vories, architectural hardware, OSC architectural hardware, Japanese National Diet Building

### 1 はじめに

明治以降の日本の近代化は、西洋諸国の様々な影響を受けて進められた。その中でもキリスト教宣教師の果たした役割は特筆すべきである。彼らは、キリスト教宣教だけでなく、教育、医療、事業、社会福祉など、多岐にわたる分野で活動し、日本の近代化に大きく貢献した。

これらの宣教師の分類には、明治政府が近代化に必要な技術や知識を導入するために雇い入れたお雇い外国人と呼ばれるもの、ミッションボードと呼ばれる海外の教会から派遣されたものがある。また、このような宣教師とは異なり、英語教師として米国 YMCA によって日本の学校に派遣された者がいた。彼らの中には、宣教師の資格を未取得でありながらも、英語教師としての働きに加え、課外などでのバイブルクラスを実施するなど、教育だけではなく、日本におけるキリスト教宣教に大きな功績を残した者がいる。この YMCA 英語教師として

日本で活動した人物に、滋賀県近江八幡市に派遣されたウィリアム・メレル・ヴォーリズがいる。ヴォーリズについては、建築分野での活動やメンソレータム事業に関してはよく知られている。しかしながら、ヴォーリズが日本の建築金物の発展に果たした貢献についてはあまり知られていない。しかしながら、ヴォーリズの建築金物における貢献は、日本の国会議事堂の建築に関わるなど大きなものであり、日本におけるキリスト教宣教の働きのひとつとして着目すべき事柄である。

本研究は、ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築における貢献について、国会議事堂の建築金物にはじまる OSC (近江セールズ株式会社 (Omi Sales Company) の略) 製の建築金物事業に焦点を当てて論じるものである。その目的は、近代化する日本において、建築や教育、事業において様々な面での功績を残したヴォーリズについて、建築金物という面での功績を明らかにすることである。なお、この論文において、「建築金物」という言

\*1 東北学院大学文学部総合人文学科  
okado@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

葉が示すものは、ドアノブ、錠前、及び、付属金属のことにする。

ヴォーリズの活動の一つに、1920年(大正9年)に滋賀県に設立した近江セールズ株式会社(以下 近江セールズ)による海外からの輸入・販売事業があった。この活動で、海外から建築に関する材料や建築金物などの付属品、メンソレータムという薬品、その他雑貨を輸入し、日本に流通させる役割を担った。その中の一つに、米国サージェント社(SARGENT)製の建築金物の輸入・販売があり、近江セールズは、米国サージェント社製のドアノブや錠、蝶番などの建築金物を輸入・販売を行っていた。

転機が訪れたのは、1920年(大正9年)に着工され、1936年(昭和11年)に完成した国会議事堂の建築であった。国会議事堂の建築にあたり、大蔵省営繕管財局は、国会議事堂の建築金物について、ヴォーリズを通して、近江セールズに依頼した。ヴォーリズは、その要請に応じ、近江セールズにおいて、米国サージェント社製建築金物の輸入、及び、国産のOSC製建築金物を製造し、国会議事堂に納入した。そして、これを契機として、OSC製の建築金物は、官庁をはじめ、著名な建築物での利用が進むことになる。

このようなヴォーリズの建築金物における貢献はあまり知られていない。ただし、国会議事堂をはじめ、多くの建築物に利用されたヴォーリズの建築金物に関する活動は、日本の近代化における西洋建築の発展において大きな役割を果たしたといえる。

ヴォーリズの建築金物における功績について、佐々木宏は、『現代建築の条件』において、次のようにヴォーリズの功績を再評価する必要性を記している[1]。

レーモンドの名とともに逸することができないのは、昭和の戦前において、日本で最大の設計事務所を形成していたヴォーリズのことである。ヴォーリズは、建築デザインのうえでとくに新しい創造的な活動を示したわけではなかったが、アメリカの建築技術の水準を常に適用し続けることによって、建築家の個性ではなく、建築材料や部品の適用の技術全般に大きな影響を与えた。このことは、近代的合理化の線のひとつとして今日再評価する必要があるだろう。たとえば、建築技術史におい

てすら無視されているHardware(建築金物)に関して、ヴォーリズ事務所の影響は日本中に及んでいると過言ではなかろう。Hardwareの第一人者である山本貞吉の研究と努力は、ヴォーリズなくしては考えられないのである。(佐々木宏、『現代建築の条件』、彰国社、(1973)、p.80)

また、ヴォーリズが近江セールズにおいて製造・販売したOSC製の建築金物の品質の高さについては、清水建設株式会社広島設計課勤務の伊藤幸一が『建築と社会』32(9)において、次のように述べている[2]。

建材界に望む

建具金物一般が戦後未だ貧弱で、戦前の金堀、O.S.C. 日金級の製品が市場に出ることを望みます。品質及種類の点で現在は不自由を感じます。

(『建築と社会』、日本建築協会、32(9)、(1951年9月)、p.21)

このように、ヴォーリズが関わった近江セールズによる建築金物については、国会議事堂の建設で採用されたこと、そして、その品質の高さから、日本の西洋建築の発展に大きな功績を残したといえることができる。しかしながら、ヴォーリズが国会議事堂の建築に関わっていたこと、そして、OSC製の建築金物が国会議事堂をはじめ、日本の西洋建築に数多く採用されたことについてはあまり知られていない。

そこで、この論文では、建築金物に着目し、特に国会議事堂建設においてヴォーリズが果たした役割について、その経緯及び現地調査をもとにその功績を明らかにすることを目的とする。

なお、引用資料における旧字体・旧仮名遣については、適宜、新字体・新仮名遣いに改め、その他、字体や読点についても一部書き改めた。

## 2 ウィリアム・メレル・ヴォーリズの生涯

まず、ウィリアム・メレル・ヴォーリズの生涯について、ヴォーリズの著書である「失敗者の自叙伝」[3]を資料として、記述する。

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ(William Merrell Vories)は1880年(明治13年)10月28日、米国カンザス州レブンワースにて、父ジョン・ヴォーリ

ズ、母ジュリア・ヴォーリズの長男として生まれた。その後、1886年(明治19年)にフラッグスタッフに、1896年(明治29年)にデンバー市に転居している。1900年(明治33年)には、イーストデンバー高校を卒業し、コロラド大学に入学し、そこでYMCAの活動に参加する。

大学在学中、1902年(明治35年)にカナダのトロントで開かれた学生宣教義勇団(Student Volunteer Movement)の大会に出席し、そこで中国での伝道に関する講演を聞き、外国伝道への献身を決意する。そして、1905年(明治38年)、東京YMCA同盟からの連絡を経て、当時英語の外国人教師を求めている、滋賀県立商業学校の教師として、同年2月2日に近江八幡に着任した。英語教師としての働きのほかに、課外時間を用いてバイブルクラスを八幡商業学校(現県立八幡商業高等学校)、彦根中学校(現県立彦根東高等学校)、膳所中学校(現県立膳所高等学校)、米原中学校(現県立米原高等学校)で実施した。

1905年(明治38年)の日本においては、すでに1899年に発令された文部省訓令12号により、公立学校での宗教教育が禁じられており、このような状況下で、公立学校においてバイブルクラスが実施されたことは、滋賀県、そして、日本のキリスト教宣教において大きな意義があったといえる。さらに、ヴォーリズはこのバイブルクラスを基礎として、日本で最初中等学校における学生YMCA「八幡キリスト教青年会」を創立するなど積極的な青年への宣教を実現している。このバイブルクラスの参加者には、その後のヴォーリズの活動を支えた吉田悦蔵や村田幸一郎、桜美林大学を創立した清水安三、天文学者であった山本一清などがいる。また、ヴォーリズの建築金物事業において大きな役割を果たすことになる山本貞吉もこのバイブルクラスの参加者であった。

1907年(明治40年)2月、滋賀県近江八幡に、八幡キリスト教青年会館を建設する。同年3月15日、八幡商業学校の英語教師を解職となるが、その後も近江八幡にとどまり続け、1908年(明治41年)、京都三条基督教青年会館の一室にて、建築設計監督を開業する。これを機縁として、ヴォーリズ設計事務所(現株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所)を開設し、その後、日本の各地の建築設計に携わる。

1918年(大正7年)、「近江基督教慈善強化財団(近江ミッション)」(現公益財団法人近江兄弟

社)、および、結核療養所「近江療養院」(近江サナトリウム、現公益財団法人近江兄弟社ヴォーリズ記念病院)を開設し、1920年(大正9年)12月6日に、近江セールズ株式会社(現株式会社近江兄弟社)を設立し、メンソレータムの販売、建築に関する材料や建築金物などの付属品、その他雑貨を輸入・販売を行う。また、1922年(大正11年)、「清友園幼稚園」(現学校法人ヴォーリズ学園)を設立する。

1941年(昭和16年)、日本国籍を取得し、一柳米来留(ひとつやなぎ めれる)と改名する。1954年(昭和29年)、社会公共事業に対する功績により藍綬褒章を受ける。1958年(昭和33年)、近江八幡市名誉市民第一号の待遇を受け、1960年(昭和35年)には、日米修好通商100年記念に際し、功労者としての顕彰を受け、さらに、1961年(昭和36年)に、建築業界における功績により黄綬褒章を受ける。

1964年(昭和39年)5月7日、死去。同年、正五位勲三等瑞宝章を受ける。

このように、ヴォーリズは、その生涯において、YMCAの英語教師としての来日を契機として、キリスト教伝道、事業、医療、教育、建築など様々な活動により多くの功績を残している。

### 3 近江セールズ株式会社

ヴォーリズは、1918年(大正7年)に開設した「近江基督教慈善強化財団(近江ミッション)」という事業において、4つの部門(近江キリスト教伝道部、近江療養院、ヴォーリズ建築事務所、近江セールズ株式会社)を展開しており、そのひとつが近江セールズ株式会社であった[4]。近江セールズは、1920年(大正9年)9月12日に設立されており、「日本全国諸会社役員録第29回」に、次のように記されている[5]。

近江セールズ株式会社

蒲生郡八幡町

設立対象 9年12月、資本金拾萬円一株 5拾円、拂込高五萬円

取締役 吉田悦蔵

同 村田幸一郎

同 ウキリアム、メルル、ヴォーリズ

監査役 浪川岩太郎

(商業興信所 編、日本全国諸会社役員録第29回、商業興信所、(1921)、p.245)

そして、近江セールズの事業内容については、「近江ミッション・ハンドブック草稿」に近江セールズ株式会社定款が記されており、そこに以下のよう  
に記されている[6]。

近江セールズ株式会社定款  
第壹章 総則  
第壹条 當会社ハ近江セールズ株式会社ト  
称す  
第貳条 當会社ハ諸建築材料及附属品、塗  
料、藥品、并ニ雜貨ノ輸出入販売ヲ為シ利益  
ノ大部分ヲ近江基督教慈善教化財団ニ贈与  
スルヲ以テ目的トス  
(吉田悦蔵、近江ミッション・ハンドブック草稿、  
近江ミッション図書、(1925)、p.29)

また、「官報 1921 年 5 月 3 日」にも以下のよう  
に記されている[7]。

株式会社設立 商號近江セールズ株式會社  
本店滋賀蒲生郡八幡町大字魚屋町 29 番地  
目的諸建築材料及付屬品塗料藥品並ニ雜貨  
ノ輸出入販売 設立年月日大正 9 年 12 月 6  
日  
(大蔵省印刷局 [編]、官報、日本マイクロ写  
真(1921 年 05 月 03 日)、p.17)

この目的に記されている薬品は、メンソレータム  
のことであり、近江セールズの中心的事業であり、  
良く知られている事業である。ただし、目的におい  
て、建築材料及付屬品が先に記されているように、  
設立当初においては、建築材料及付屬品、すな  
わち、建築金物についてもメンソレータムと同様、  
中心的事業であったことがわかる。ヴォーリズは、  
1908 年(明治 41 年)に建築設計監督を設立して  
おり、この建築事業に用いる建築材料及付屬品を  
輸入していた。建築材料及付屬品の輸入を始める  
契機については、『近江兄弟社 60 年史(草稿)』第  
6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」にその  
必要性について以下のように記されている[8]。

大正 年( )年ごろから雜貨部では、建築  
金物などはできれば国産品を用いたが、内地  
品では数ヵ月で用をなさぬようになり、甚  
だしいのは、まだ工事が終了しないうちに破

損したりして、思わぬ不便を感じる場合があ  
るので、いろいろ検討した結果、堅牢無比と  
称されている米国のサージェント会社製の建  
築金物を輸入して、市販すると共に、建築部  
が施工する工事にも使用して、非常に好評を  
博していた。

(『近江兄弟社 60 年史(草稿)』第 6 分冊「昭  
和時代 1 昭和 1 年から 10 年」(1961 年着  
手) p.11)

また、『近江の兄弟ヴォーリズ等』には、建築金  
物の輸入を始めたことについて年代の記載がある  
[9]。

大正 9 年には、建築材料の輸入販売を始め  
て、近江セールズ株式会社が設立された。  
(吉田悦蔵、近江の兄弟ヴォーリズ等、警醒  
社書店、(1923 年)、p.191)

このように、近江セールズは、建築事業に必要と  
なる建築金物について、国産品では十分な品質  
のものが得られなかったことから、建築金物の輸  
入・販売を開始したことがわかる。

そして、近江セールズの事業内容の詳細につ  
いては、1925 年(大正 14 年)に発行されている  
「近江ミッション・ハンドブック草稿」の広告に、取扱  
商品として以下のものが挙げられている[10]。

世界的家庭常備薬メンソレータム  
英国オットウェイ会社天体望遠鏡  
米国モーア会社ペキ及ステーン各種  
米国サージェント会社建築用建具金物各種  
暖房装置衛生器具  
西洋家具  
ミーズナー、ピアノ  
(吉田悦蔵、近江ミッション・ハンドブック草稿、  
近江ミッション図書、(1925)、p.88)

この資料には、建築金物について、「米国サー  
ジェント会社建築用建具金物各種」のみが掲載さ  
れており、1920 年(大正 9 年)からはじめたと記さ  
れている建築材料に関する記述は、米国サージェ  
ント社のものであることがわかる。

これらのことから、近江セールズは、1920 年(大  
正 9 年)より、建築材料の輸入・販売を開始して  
おり、そこで、米国サージェント社建築用建具金物各  
種の輸入・販売を行っていたことがわかる。そして、

これが後の国会議事堂への建築金物を納入する役割につながるのである。

新議事堂竣工画報、日刊土木建築資料新聞社、(1937年)、p.99)

#### 4 国会議事堂建設における建築金物

明治以降、開国をした日本には西洋文化が急速に流入した。あらゆる領域に西洋文化の影響が及び、日本の近代化と共に西洋文化の発展が実現した。外国からの輸入による西洋文化の発展が続く中、製造業においては、輸入に頼るのではなく、日本において内製化するという動きが生じる。そして、その代表的なものが国会議事堂の建設であった。

国会議事堂は、1920年(大正9年)1月に着工され、1936年(昭和11年)に完成した。建設にあたり、1908年(明治41年)1月「議院建築の方法に就いて」が工学博士 辰野金吾、塚本靖、伊東忠太により作成され発表された[11]。

凡そ世界の文明國に於て、其最重要なる建築は即ち國會議事堂に如くはなし、國民の宗教的信仰が凝て大伽藍の建築を成すが如く、國民の政治的思想は結で議事堂の建築となるぞかし、去れば欧米諸國の質例を觀るも、巍々として帝都幾千の高樓を歴し、堂々として王城の大厦を脱するものは即ち國會議事堂の建築ならざるはなし、我國亦斯の如き宏壯偉大なる議院建築を起すべき機正に熟せり、其形式、手法、構造、裝飾は共に我國民の學識と技術の粹を集め、以て我威を世界に發揚するに足るものならざるべからざるなり。(日本工学会 編、明治工業史〔第5〕、日本工学会、(1927)、p.752)

この中で、「其形式、手法、構造、裝飾は共に我國民の學識と技術の粹を集め、以て我威を世界に發揚するに足るものならざるべからざるなり。」として、議事堂の建設においては、国産品を採用することを目指すことが示された。しかしながら、この方針は、すべてに適應されたのではなく、当時の日本の技術では製造することが困難であったものについては、いくつか輸入品が採用されたと記録されている[12]。

原則として純国産品を目標としつつあったが、常時は吾邦に於いて、十分の發達を遂げて居なかつた、數種の例外はある。(帝国議會

そして、その例外の輸入品については、国立国会図書館月報「本の万華鏡」第28回 国会議事堂ができるまで」に、「当初、すべての建材を国産で賄うことを目指していましたが、ドアノブと郵便差入口、そして中央広間のステンドグラスのみ外国製のものが使われました。」「[13]とあり、ドアノブと郵便差し入口、中央広間のステンドグラスが輸入品であったことが示されている。

そして、この中の、ドアノブについては、2018年(平成30年)6月30日に衆議院事務局が出版した「移りゆく白亜の議事堂 国会議事堂 新ガイドブック」[14]に、「議事堂本館内の各部屋の鍵はアメリカ製の鍵が使用され、本院内では現在もアメリカ製の鍵がつけられていて、鍵穴の部分にアメリカの鍵メーカー「SARGENT」社の刻印が入っています。現在も存在するメーカーで、当時も同じメーカーでした。なぜアメリカ製なのか、それは特許の問題とされています。」と報告されており、外国製の鍵に外国製(SARGENT)が使われていること、そして、それは建設当時も同じであったことが示されている。

また、外国製が採用されたことについては「なぜこのメーカーのものを使用したのかの確たる理由はわかりません。」と記載されている。このように国会議事堂の建設に関する資料からは、ドアノブについては、議事堂建設の方針であった国産品の使用ができず、建設当初より外国製が採用されたことが示される。

#### 5 国会議事堂と近江セールズ

国会議事堂の建築金物(錠及び付属金属、ドアノブ)について、上記の記述とは異なり、国産品が納入されたことを示す資料がある。それは、1937年(昭和12年)に発行された『帝国議會 新議事堂竣工画報』である。この中に企業広告のページがあり、そこに国会議事堂の建設に携わった企業の広告が掲載されている[15]。そして、そこに近江セールズの広告が掲載されている。それによると、国会議事堂(御便殿、貴衆両院)のドアノブに、OSC(近江セールズ株式会社)製のドアノブが採用されていることが示されている。また、同年1937年(昭和12年7月発行)に発行された『ヴォーリズ建築事務所作品集』[16](城南書院)にも同様の

広告が掲載されており、それにも、国会議事堂のドアノブに東京 蒲田の工場で作られた国産品 OSC 製のドアノブが使用されていることが示されている。

また、『湖畔の声』1931年(昭和6年)1月号には、近江セールズが国会議事堂の建築金物を担当したことについて、次のような記述があり、近江セールズが国会議事堂の建築金物に米国サージェント社製の建築金物および OSC 製の建築金物を納入していたことがわかる[17]。

近江セールズ雑貨部は、此程、日本帝国議会、議事堂の内部建具用金物を納品する様に命令を受けました。納品には、国産品あり又米国サージェント会社(近江ミッション代理)の金物等あって、金額は数千円に達し、またあと続々官庁方面にも納品します。東京出張所の萩原、黒石両氏の努力あった次第であります。

(湖畔の声、湖声社、1月号、(1931)、p.18)

さらに、近江兄弟社 60 年史(草稿)』第 6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」(1961 年着手 p.8)[18]にも、同様の記載がある。

昭和 5 年(1930 年)には、日本帝国議会、議事堂の内部建具用金物を納入するように命令を受けた。これには国産品もあるが、米国サーゼント会社の金物等も含まれて、かなり多額にのぼった。そして、これが諸口となって、続々官庁方面からも受注するようになった。

(近江兄弟社 60 年史(草稿)』第 6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」、(1961 年着手)、p.8)

このように、近江セールズが国会議事堂の建築金物について、米国サージェント社製及び OSC 製の建築金物を納品していたことが資料として残されている。また、このことを示す資料として、『帝国議会議事堂建築報告書』[19]に、近江セールズについての記述があり、具体的な内容及び金額が示されている

まず、7. 本館内装工事 (3)天井下地其他において、「蝶番は真鍮製隠し蝶番(ヨシムラ建材材料店の製品又は近江セールズ株式会社製)と記載されている。

また、第 4 節 請負工事において、以下のように近江セールズが錠及金物製作の制作および工事を請け負ったことが示されている。

「議院本館第 2 回錠及付属金物製作 昭和 5 年 12 月 13 日、昭和 6 年 4 月 21 日、1,354.000 円、近江セールズ株式会社」  
([大蔵省]営繕管財局 編、帝国議会議事堂建築報告書〔本編〕、営繕管財局、(昭和 1938)、p.550)[20]

「議院本館第 3 回錠及付属金物製作 昭和 6 年 3 月 5 日、昭和 6 年 12 月 5 日、730.000 円、近江セールズ株式会社」  
([大蔵省]営繕管財局 編、帝国議会議事堂建築報告書〔本編〕、営繕管財局、(昭和 1938)、p.551)[21]

「議院本館第 5 回錠及付属金物製作 昭和 6 年 10 月 6 日、昭和 6 年 11 月 4 日、465.600、近江セールズ株式会社」  
([大蔵省]営繕管財局 編、帝国議会議事堂建築報告書〔本編〕、営繕管財局、(昭和 1938)、p.554)[22]

「議院本館第 6 回錠及付属金物製作 昭和 7 年 1 月 26 日、昭和 7 年 5 月 24 日、5,100.000、近江セールズ株式会社」  
([大蔵省]営繕管財局 編、帝国議会議事堂建築報告書〔本編〕、営繕管財局、(昭和 1938)、p.555)[23]

「議院本館第 7 回錠及付属金物製作工事 昭和 8 年 4 月 22 日、昭和 8 年 8 月 18 日、3,200.000、近江セールズ株式会社」  
([大蔵省]営繕管財局 編、帝国議会議事堂建築報告書〔本編〕、営繕管財局、(昭和 1938)、p.558)[24]

なお、第 4 回については、「議院本館第 4 回錠及付属金物製作工事 昭和 6 年 5 月 26 日、昭和 6 年 9 月 22 日、307.200、渡邊久雄」[25]と記載されている。渡邊久雄は、渡邊久雄商店を運営しており、米国 YALE 会社製の建築金物を輸入していた。

また、第 6 節 工事用物品購入においては、以

下のように近江セールズから錠及付属金物を購入したことが示されている。

「議院本館第 1 回錠及付属金物製作購買  
昭和 5 年 1 月 15 日、昭和 6 年 4 月 3 日、  
錠及付属金物、154 組、4,250.000、近江セ  
ールズ株式会社」  
([大蔵省]営繕管財局 編、帝国議会議事堂  
建築報告書〔本編〕、営繕管財局、(昭和  
1938)、p.591)[26]

このように、国会議事堂の建設において、その錠及付属金物(ドアノブ)に関して、ヴォーリズの設立した近江セールズが関わっていることは国会議事堂の資料からも読み取ることができる。

なお、金額としては、渡邊久雄が 307.200 円であるのに対し、近江セールズは、総計 15,099.600 円であり、近江セールズが主たる請負業者であったことがわかる。

## 6 近江セールズが国会議事堂に建築金物を納入した経緯

国会議事堂のドアノブ(錠及付属金物)をヴォーリズが設立した近江セールズが納品したことについては、近江セールズの社員であった山本貞吉が、彼の著書である『新建築金物』(山本貞吉、新建築金物、城南書院、(1959))、及び、『人生問題清月夜話』(山本貞吉、人生問題清月夜話、力興堂(1962))においてその経緯を記している。ここでは、山本貞吉のこれら著書を資料として、国会議事堂に近江セールズが建築金物を納入した経緯について述べていく。

まず、山本貞吉について記す。山本貞吉は、建築金物に関する著作『建築金物』(山本貞吉、建築金物、城南書院、(1937年))、『新建築金物』を執筆しており、また、自らの生涯を記した『人生問題清月夜話』を出版している。山本貞吉は、日本における建築金物の歴史において大きな役割を果たした人物である。佐々木宏は、『現代建築の条件』において、山本貞吉を以下のように評価している[27]。

Hardware(建築金物)に関して、ヴォーリズ事務所の影響は日本中に及んでいると過言ではなかろう。Hardware の第一人者である山本貞吉の研究と努力は、ヴォーリズなくして

は考えられないのである。

(佐々木宏、現代建築の条件、彰国社、(1973) p.80)

また、『新建築金物』には、東京工業大学名誉教授 工学博士 小林政一が序言を記しており、山本貞吉が近江セールズの社員であり、ヴォーリズと活動を共にしたこと、そして、日本における建築金物での功績について、高く評価している[28]。

序言

山本氏は、昭和 12 年に建築金物という書物を書かれて、当時の建築界を驚かせたものである。それと云うのは日本において此の種の著書としては最初のことであったからである。氏は近江セールズ会社のボーリズ氏を助けて OSC 建築金物工場経営に携わってきた方であるが、専ら技術方面を研究し、永年に亘る経験の蘊蓄を傾けて著作されたものであった。

何しろ、当時は、この種の著書は殆ど無かったから、建築界から非常に受けられ、大いに利用された。所が終戦後は絶版になって今日に到ったので、誠に惜しい次第であると思っていました。(中略)

山本氏は、言わば生粋の近江セールズ育ちである。永年 OSC 建築金物を盛り立ててきたのであったが、空襲で同社が焼失し、戦後は再起しなくなったので誠に惜しいことである。然し、山本氏はその後も建築金物会を離れず、ますます研究を積み、今日まで広く業者の指導役として立って来た。思えば山本氏の建築金物に関する生活は実に永いものである。今後も、凡らく一生この専門家として続けるであろう。業界に「鍵の山本」と言われるのも偶然ではない。

(山本貞吉、新建築金物、城南書院、(1959)、序言)

さらに、同書のもう一つの序言において、早稲田大学教授 工学博士 十代田三郎が、山本貞吉とヴォーリズ、そして、米国サージェント社との関係が密であったことを記している[29]。

曾て欧米視察に出かけた時、本著者山本貞吉氏の好意によりヴォーリズ先生の紹介を頂いて、米国の有名な錠前メーカーのサーゼン

ト工場を訪れたことがある。

当時、80歳のチェリー支配人が雪の中を自ら自動車を運転して大工場に案内され、くまなく参観し、流れ作業による建築金物の大量生産方式を会得することが出来た。此真髓がOSC建築金物となって日本の建築材料に貴重な貢献をもたらしたのである。

(山本貞吉、新建築金物、城南書院、(1959)、序言)

これらの記述から、山本貞吉が日本の建築金物において大きな功績を残していること、そして、近江セールズの社員としてヴォーリズとともに活動をしたこと、そして、米国サージェント社と密な関係を築いていたことがわかる。

このように近江セールズでヴォーリズと共に社員として働き、建築金物において大きな功績を残した山本貞吉の経歴について、山本貞吉の著書『人生問題清月夜話』を資料として記す[30]。

山本貞吉は、1892年(明治25年)5月15日に滋賀県坂田群息郷村樋口(現在の滋賀県米原市)で山本嘉兵衛の5人目の子どもとして生まれた。小学校を優等で卒業した貞吉は、「14歳の先生」として、村の小学校に代用教員として採用されている。16歳になった時、大津の滋賀県師範学校に入学し、優等で卒業し、再び村の小学校に勤務するが、中等教員英語科検定試験を2度失敗したことを契機として、英語を学習することを目的として、27歳の時に東京に上京する。そして、正則英語学校、及び、国民英語学会の高等科に進学し、その後、東京外国語学校英語科にも入学し、英語に関する学習を深めている。卒業後、外務省の翻訳課に勤務するが、外交官試験に3度失敗したことで外交官になることをあきらめ、英語を活用する仕事として、「外国商館」に入ることを目指し、「米国貿易商会」に入社する。ただし、語学力や商才、外交力はありながらも、「器機に対する技術力」の不足を指摘され、支配人より退社を命じられている。そこで、貞吉は、物理学の学習をすることを宣言し、6か月の猶予を貰い、東京物理学校で器械学を習得し、「米国貿易商会」で3ヵ年勤務している。その後、当時世界一の大会社であったロックフェラー投資下であった「紐育スタンダード石油会社横浜支店」に入社し、15年勤務している。退社後の貞吉は、渋谷の百貨店で「金物店」を開き、それまでの大問屋からの支援を受け、石油コンロと石油スト

ープの委託販売を6年間行っている。そして、この時に、貞吉はヴォーリズから要請を受け、近江セールズに入社し、建築金物工場の責任者として勤務することになる。貞吉とヴォーリズの関係、そして、近江セールズの入社の経緯については、後述する。

終戦前に滋賀県の米原に疎開した貞吉は、連合軍において勤労奉仕で通訳として勤め、終戦後は、京都の終戦連絡事務所で進駐軍の建築技師通訳として1年半勤務し、その後も進駐軍の通訳として勤務を続け、進駐軍建築を専門にする株式会社山一土建に入社し、10年間勤務した。

このような山本貞吉とヴォーリズとの関係は深く、滋賀県時代までさかのぼることができる。

1905年(明治38年)に滋賀県商業学校の英語教師として来日したヴォーリズは、近江八幡をはじめ、彦根、米原などでもバイブルクラスを実施していた。山本貞吉は、このバイブルクラスの受講者であったのである。『人生問題清月夜話』には次のように当時のことが記されている[31]。

ここに又一生の奇縁になった人が現れてきた。それは、八幡商業学校の英語教師米人ヴォーリズであった。彼は膳所中学校へも教えに来た。その来る度毎に近所にある師範学校に必ず立寄って得意の「ピアノ」を弾く事であった。音楽好きな貞吉にとって殊に英語熱中者にとってはベストチャンスである。直ちに話し寄って忽ちにして親友になってしまった。それから日曜日毎に大抵八幡に出掛けて行ってヴォーリズのバイブルクラスに参加したものであった。

(山本貞吉、人生問題清月夜話、力興堂、(1962)、p.12)

このように、師範学校に通っていた貞吉は、そこでヴォーリズと出会い、その後、バイブルクラスでの親交を深めている。さらに、ヴォーリズが英語教師を解職された後にもその交流は続いている。

ヴォーリズは、英語教師を辞めて基督教伝道を目的とした「近江兄弟社」を設立して、「ヴォーリズ建築事務所」を始めていた。そこには米人技師が3人もいた。そして篤志の米人伝道者もいた。貞吉はいよいよ緊密にヴォーリズに近寄って伝道の仕事を手助けした。特に米人

伝道者が56ヶ所でバイブルクラスを開いていた所へも出かけて行ってついには其の通訳までやるようになった。

(山本貞吉、人生問題清月夜話、力興堂、(1962)、p.12)[32]

その後、上京した貞吉とヴォーリズは袂を分かつことになるが、二人が再開する時が訪れる。それが国会議事堂建設において、ヴォーリズが設立した近江セールズがその建築金物を担当するときであった。

ここからは、近江セールズが国会議事堂に建築金物を納入した経緯について記す。ただし、この経緯については、国会議事堂に関する資料には、前述したように近江セールズが納品した記述があるのみであり、近江セールズが選ばれた経緯については知ることができない。これらの経緯については、近江兄弟社の資料である『湖畔の声』、『近江兄弟社60年史(草稿)』、及び、山本貞吉の記した『新建築金物』、および、『人生問題清月夜話』に限られる。ここではこれらを資料として、当時の時代背景とともにその経緯について記す。

今迄の洋式直訳模倣時代の反動として遂に濱口内閣の国産品専用時代となった。当時代表的建築たる議事堂建築が実現されるに至り、其れに使用する金物が一大問題となった。(山本貞吉、新建築金物、城南書院、2版、(1959)、p.7)[33]

前述したように、国会議事堂の建設においては、国産品の使用が原則とされたが、建築金物については、当時はまだ国産が発展しておらず、国産の利用が困難であった。そのような中、近江セールズは、1920年(大正9年)から米国サージェント社の建築金物の輸入・販売をしていた実績があり、また、以下の資料が示すように、1929年(昭和4年)からは自社製品(OSC)についても製造・販売を行っていたことがわかる[34]。

こうして数年間続いたが輸入品はどうしても高価につくので、雑貨部東京出張所では、同型式のものを国内で生産することに決め、昭和4年(1929年)月、国産建具金物 O.S.C を外注し、販売することになった。

(近江兄弟社60年史(草稿)第6分冊「昭和

時代1 昭和1年から10年」、(1961年着手)、p.11)

このように、近江セールズは、国会議事堂からの要請を受ける前に、すでに外注という形ではあったがOSC製のドアノブの販売をしていた。そして、米国サージェント社製の建築金物の輸入・販売を行っていたこと、また、国産品の製造・販売を行っていたこと、このことが評価され、以下のように大蔵省営繕管財局からの依頼を受けることになったと考えることができる。

即ち、これが設計監督社たる大蔵省営繕管理財局は、米人技師ヴォーリズ氏に相談した結果、当座の処置として米国のサージェント会社の錠前蝶番ドアーチェック等を使用することにした

(山本貞吉、新建築金物、城南書院、2版、(1959)、p.7)[35]

近江セールズ雑貨部は、此程、日本帝國議會、議事堂の内部建具用金物を納品する様に命令を受けました。納品には、國産品あり又米國サージェント會社(近江ミッション代理)の金物等あつて、金額は數千圓に達し、またあと續々官廳方面にも、納品します。東京出張所の萩原、黒石兩氏の努力効あつた次第であります。

(湖畔の声、湖声社、1月号(1931)、p.18)[36]

国産品の調達が困難な中、国会議事堂の建設を担う大蔵省営繕管財局は、すでに米国サージェント社製の建築金物を輸入・販売していた近江セールズを運営するヴォーリズに依頼することになる。このことについては、前述のように「帝國議會議事堂建築報告書[本編]」に「議院本館第1回錠及付属金物製作購買 昭和5年1月15日、昭和6年4月3日、錠及付属金物、154組、4,250,000、近江セールズ株式会社」[26]との記述があることから、1930年(昭和5年)1月までに依頼されたと考えることができる。そして、その後の近江セールズの活動については、次のように記されている。

そこで、同氏は、サージェント会社の諒解の下に蒲田にOSC建築金物工場を特設して、

大至急に国産金物製造に着手したのである。其等の金物は、直ぐに議事堂建築に採用されたのである。

(山本貞吉、新建築金物、城南書院、2 版、(1959)、p.7) [37]

この部分については、『人生問題清月夜話』にも次の記述があり、営繕管財局からの依頼を受けたヴォーリズが山本貞吉に連絡をし、近江セールズによる建築金物への協力を要請したことがわかる [38]。

恩師ヴォーリズ先生の迎いが来た。それはヴォーリズ建築事務所の設計の仕事が全国的に拡がり、其の結果建築金物工場を新設することになった。それには大蔵省営繕管財局からの特別指名で国会議事堂建設に伴う建築金物の製造のことであった。その当時は日本にろくな建築金物とはなかったのが唯一初めての工場である。先見に秀でている貞吉は、金物店を止めて此方(こなた)に走った。

(山本貞吉、人生問題清月夜話、力興堂(1962)、p.23)

山本貞吉は、ヴォーリズからの要請を受け、近江セールズに協力することになる。そして、米国との貿易の経験、英語力を発揮して、それまでの近江セールズがしていた輸入・販売だけではなく、国会議事堂の要請である国産品を製造・販売するために米国サージェント社に働きかけている [39]。

そして米国のサーゼント金物会社から製造許可を貰って蒲田に建築金物の大工場を起こした。其の製品は建造中の国会議事堂工事に次から次へと使われた。これが縁となって当時、ビル建築がだんだんとふえて行った時であったから、その製品は引っ張り綱で使われていった。而も大蔵省御用品の宣伝がきいて次々次々に全国に広がって行った。工場はだんだん拡張されて行った。

(山本貞吉、人生問題清月夜話、力興堂(1962)、p.23)

当初は外注であった建築金物の製造であったが、1932 年(昭和 7 年)には、東京に工場を設け、OSC 製の建築金物を自社製造販売することにな

る。これについては、1932 年(昭和 7 年)発行の『国有鉄道資料集覧 昭和 7 年版』に金属並鐵製品の優良国産品として近江セールズ株式会社が掲載されている [40]。この資料から、1932 年(昭和 7 年)の時点で OSC が商標登録されており、工場は、OSC 建具金物製作所(蒲田工場)と呼ばれ、東京府荏原郡六郷町字町屋 88 にあったことがわかる。また、工場での製作品目については、以下のものが挙げられている。

工場製作品目

国産 OSC 印 各種シリンダー錠

同 シリンダーナイトラッチ

同 非常口錠

同 堀込箱錠

同 ドアクローザー

同 自由蝶番

同 フロアーヒンジ

同 ボールベアリング入蝶番

同 ルーズピン蝶番

建具金物一切

(鉄道技術社、国有鉄道資料集覧 昭和 7 年版、鉄道技術社、(1932 年)、p.98)

このように自社工場を設けることにより、近江セールズは、国産の OSC 製建築金物を製作することを実現することで、国会議事堂の建築金物について、米国サージェント社製のもの、及び、OSC 製の国産品を納入することが可能となったのである。

このような経緯で、国会議事堂の建築金物について、近江セールズにより、米国製、及び、国産品が納入されたのである。

## 7 国会議事堂での現地調査

これまで述べたように、国会議事堂の建築金物については、米国サージェント社製、及び、OSC 製が採用されていることを資料から読み取ることができる。しかしながら、実際の納入状況についての報告をしている資料はなく、また、現在の国会議事堂の建築金物がどのような状態であるかについて報告したものもない。これまでに報告されているものとしては、前述した 2018 年(平成 30 年)6 月 30 日に衆議院事務局が出版した「移りゆく白亜の議事堂 国会議事堂 新ガイドブック」[41]に、「議事堂本館内の各部屋の鍵はアメリカ製の鍵が使用され、本院内では現在もアメリカ製の鍵がつけられて

いて、鍵穴の部分にアメリカの鍵メーカー「SARGENT」社の刻印が入っています。現在も存在するメーカーで、当時も同じメーカーでした。」(衆議院事務局編、国会議事堂新ガイドブック：移りゆく白亜の議事堂、衆栄会、(2017))と、米国サージェント社のものが現存していることを示している。また、『建築金物 細部に宿る住みごこち』には、「議事堂とヴォーリズ」というコラムが掲載されており、そこでは、山本貞吉の『新建築金物』を資料として、OSC製が国会議事堂に採用されていることを報告している。また、現地調査もしているが確認できたのは、米国サージェント社製のものだけだと報告している[42]。

現在の議事堂を見に行くと、大半の部屋の錠前に「SARGENT」の刻印がある。残念ながら「OSC」刻印のものは確認できなかった。本当にあるとすれば、議場の入口などごく限られた場所に用いられたのだろう。

(高橋真, 中村好文, 堀英樹、建築金物 細部に宿る住みごこち、INAX、(2002)、p.59)

そこで、この研究では、2022年(令和4年)4月、衆議院事務局、参議院事務局の協力を得て、国会議事堂の建築金物の実態について調査した。ここに、その調査で確認できたことを報告する。なお、国会議事堂の錠及付属金物については、1936年(昭和11年)の完成からおおよそ50年後に取替工事が実施されており、その際、新たに製作された米国サージェント社製の錠及付属金物が納品されている。そのため、ここでは、建築時の錠及付属金物、錠及付属金物交換工事、現在の錠及付属金物に分けて調査結果を報告する。

まず、衆議院部分について、衆議院事務局の調査により以下のことが明らかになった。

### 建築時の錠及び付属金物

1. 1階部分については、建設当初、OSC製が使用されていた。1階部分におけるOSC製の使用率は7割5分。
2. 地階については、OSC製の使用率は約3割。OSC製の他に、米国YALE社製、米国サージェント社製が使用されている。

### 錠及付属金物交換工事

昭和60年代に1階から4階部分の錠及付属金物の取替が実施される。

1. 地階については、錠及付属金物の全面的な交換は実施されていない。

### 現在の錠及付属金物について

1. 1階から4階部分のすべてが米国サージェント社製であり、OSC製はない。
2. 地階については錠及付属金物の交換が実施されていないOSC製が残されている。

次に、参議院(旧貴族院)部分について、参議院事務局の調査により以下のことが明らかになった。

### 建築時の錠及び付属金物

1. 1階部分はほぼOSC製
2. 2階3階はほぼ米国サージェント社製
3. 4階は米国サージェント社製とOSC製の混在
4. 地階はOSC製と米国YALE社製が半々

### 錠及付属金物交換工事

1. 昭和63年度に本館各室扉錠前取替工事が実施される。
2. 地階も含め、1-4階のほとんどの錠前がサージェント社製に交換される。

### 現在の錠及付属金物

1. 地階も含め、1-4階のほとんどがサージェント社製
2. OSC製は、地階に1箇所、1階に1箇所のみ現存している。
3. 3階傍聴席入口の2箇所には、SHOWA製

この調査により、これまで資料として示されていた国会議事堂の建築金物についてその実態を把握することができた。『帝国議会議事堂建築報告書』には、錠及び付属金物の請負業者には、近江セールズのほか、渡邊久雄が記録されている[19][20][21][22][23][24][25][26]。近江セールズは、米国サージェント社製およびOSC製を取り扱っており、渡邊久雄は渡邊久雄商店として、米国YALE社製を輸入・販売していたことから、この2社により国会議事堂の錠及び付属金物が設置されたことがわかる。そして、渡邊久雄には、307,200円が支払われており、近江セールズには、

合計で 15,099.600 円が支払われていることから近江セールズが主に担当したことがわかる。

調査により、米国 YALE 社製は地階での限定的な利用であり、ほとんどが近江セールズの取り扱いであったことが明らかになり、資料と一致する結果であった。ただし、御便殿(御休所)については、近江セールズの広告には、OSC 製が採用されているという記述があるが、『帝国議会議事堂建築報告書〔本編〕』[43]に当時の写真が掲載されており、米国サージェント社製が採用されていたことがわかる。また、現在の御便殿(御休所)についても参議院事務局の調査により、当時のものか、交換されたものかは不明であるが、現在も米国サージェント社製がつけられていることが分かった。

また、米国サージェント社製と OSC 製が混在していることについては、『帝国議会議事堂建築報告書〔本編〕』に以下の記述がある。

而して工事の初期において已むを得ず外国品を使用せる防水用材料、錠前の部分、鏡硝子等僅少の物資に付いても、我国の建築工業漸く発達して信頼に足る製品の生産を見るに至るや、爾後の分は之等国産品を以てする等、あくまで国産品尊重の實を上ぐるに努めたり。

([大蔵省]営繕管財局 編、帝国議会議事堂建築報告書〔本編〕、営繕管財局、(昭和 1938)、p.408)

この記述にあるように、国会議事堂の建設において錠前の部分については、国産の品質に課題があり、当初は、外国製、すなわち、米国サージェント社製と米国 YALE 社製のものが導入されたと考えることができる。そして、国産品である OSC 製の生産により、米国サージェント社製から OSC 製への交換が行われたのであろう。ただし、その交換は、理由は不明であるが、すべてではなく、一部に限られることになった。そのため、建設当初の鍵及付属金物については、調査結果のように、外国製(米国サージェント社製、米国 YALE 社製)と国産品が混在するという事になったのであろう。

## 8 OSC 製建築金物の広がり終焉

これまで見てきたように、近江セールズは、国会議事堂の建設を契機として、米国サージェント社製の建築金物の輸入・販売を継続しつつ、国産品

である OSC 製の建築金物の製造・販売を始めた。そして、国産 OSC 製の建築金物は、当時の多くの建築物での利用が広がることになった。近江兄弟社 60 年史(草稿)『第 6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」(1961 年着手 p.8)』には、次のように記述がある[45]。

さらに、昭和 5 年(1930)には、日本帝国議会議事堂の内部建具用金物を納入するように命令を受けた。これには国産品もあるが、米国サーゼント会社の金物等も含まれて、かなり多額にのぼった。そして、これが諸口となって、続々官庁方面からも受注するようになった。(近江兄弟社 60 年史(草稿)第 6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」、(1961 年着手)、p.8)

OSC 製の建築金物が利用された建物については、『近江兄弟社 60 年史(草稿)』第 6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」(1961 年着手 p.12)に以下の建物に採用されたという記述がある[46]。

さらに、翌 8 年(1933)頃になると、O.S.C 建築金物部の事業は、いよいよ順調で、蒲田工場には 60 名の技術者があって、ドロップ・ハンマーをはじめ、各種の精巧な器械設備があり、震災復活の東京の各官庁会社工場に、その優秀な製品を納入して、純国産の金物として、輸入品を凌駕するようになって、満州にも進出する計画が起こってきた。

この頃、O.S.C 金物を使用した著名な建築物は、日本銀行、海軍大学、内務省、オリエンタル写真工業、文部省、聖ルカ病院などであった。

こうして昭和 8 年(1933)には、さらに将来の飛躍にそなえて、蒲田工場に鑄鉄工場を加え、売上高も 10 万円を超えた。

(近江兄弟社 60 年史(草稿)第 6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」、(1961 年着手)、p.12)

OSC 製の建築金物はその品質の高さから、多くの著名な建築物で利用された。しかし、その品質の高さを維持するために、収支を度外視した生産が行われ、結果として、近江セールズの建築金物

事業の終焉を招くことになった。

山本貞吉は、OSC 製の建築金物の品質の高さについて、以下のように述べている。

OSC 工場では大蔵省営繕管財局の特殊指名により、スタートし、諸官庁営繕課の指名金物を作っていたので損益を構わず優良な財を入念に仕上げて賞賛を得ることに力を入れていたのである。国会議事堂の建築金物を始めとして、主要な官庁ビルの金物は殆ど一手に納入していたのである。何しろ、メンソレータムの本舗たる近江セールズ会社の経営で収支を度外視して製品していたから良い品が出来たのである。

(山本貞吉、新建築金物、城南書院、2 版、(1959)、p.554)[47]

近江セールズは、国会議事堂の建設、そして、その後の諸官庁の建設において、収益を度外視して品質の高いものを製造していたため、財政的な課題を持つことになる。山本貞吉は、以下のように述べている。

OSC 工場は資本的に恵まれていたから、十余年続いたが毎年 50 万円余の赤字を出して行き遂に満州の大信洋行に経営を移譲してしまったのである。

(山本貞吉、新建築金物、城南書院、2 版、(1959)、p.555)[48]

このように近江セールズの建築金物事業は、収益を度外視して品質の高いものを生み出すことに注力したため、経営という面では課題を抱えることになった。そのため、山本貞吉が述べているように、近江セールズは、OSC 製の建築金物工場を売却することになる。1937 年(昭和 12 年)、当時、大連経済を代表する事業家であった石田栄造が関わっていた「大信洋行」という企業であり、満州におけるメンソレータム販売と交換で売り渡された。1937 年(昭和 12 年)の『湖畔の声』4 月号には以下の記述がある[49]。

東京市蒲田にあった OSC 金物製作工場は、満州に於けるメンソレータム販売会社と交換にこちらは金物工場を大連の大信洋行石田栄造氏に売り渡し向ふは大連福音洋行(主人

石田栄造氏)満州メンソレータム一手販売を近江兄弟社系の満州セールズ株式会社に譲って貰いました。近江兄弟社は金物製作を中止しました。

昔の雑貨部に還元し

サーゼント金物会社代理店

パールワックス代理店

(中略)

湖畔堂の仕事全般

OSC 金物の通信販売

家具ストーブ、ペイント等販売

等を昔通りに致します。

(湖畔の声、湖声社、4 月号(1937)、p.46)

近江セールズを運営していた「近江基督教慈善教化財団(近江ミッション)は、1934 年(昭和 9 年)に「近江兄弟社」に改称している。そのため、上記の文では、「近江兄弟社は金物製作を中止しました。」と記述されている。また、1936 年(昭和 11 年)には、「満州セールズ株式会社」を創立しており、「近江兄弟社系の満州セールズ」と記述されている。

このように、近江セールズによる建築金物の製造は、1937 年(昭和 12 年)で終焉を迎える。以後、近江兄弟社は、建築金物においては、米国サーゼント金物会社の代理店、および、OSC 製金物の通信販売のみに関わることになる。

そのため「湖畔の声」(1937 年(昭和 12 年)3 月号までは、「近江兄弟社とその事業」において、近江セールズ株式会社の事業として、「建築金物部」という記述があった[50]が、「湖畔の声」(1937 年(昭和 12 年)4 月号では、その記述が削除されており、建築金物事業からの撤退を示している[51]。

湖畔の声 1937 年(昭和 12 年)3 月号

近江セールズ株式会社

A薬品部 メンソレータム総本舗

B建築金物部

C建築工務部

(中略)

金物工場 東京都蒲田市区町屋町88

(湖畔の声、湖声社、3 月号、(1937 年)、p.19)

湖畔の声 1937 年(昭和 12 年)4 月号

近江セールズ株式会社

A薬品部 メンソレータム総本舗

## B建築工務部

(湖畔の声、湖声社、4月号、(1937年)、  
p.48)

1920年(大正9年)に始まった近江セールズによる建築金物事業は、このようにして、1937年(昭和12年)に終焉を迎えることになる。米国サージェント社製建築金物の輸入の初めを近江セールズの設立からとすると、17年間の事業であり、近江セールズによるOSC製建築金物の製造については、1929年(昭和4年)の委託事業から数えれば、8年間であり、さらに1932年(昭和7年)からの自社工場による期間に限れば、わずか5年のことであった。しかしながら、この5年の中で、国会議事堂をはじめ、官庁及び有力な建築物に納品することを実現している。

その後、OSC製の建築金物は、株式会社大信洋行金属部によって運営され、さらに多くの建築物に採用された。株式会社大信洋行金属部が発行していた1937年(昭和12年)のOSCカタログ[52]には、東京、関西、九州、東北、北海道に代理店があったこと、さらに、満州国、朝鮮にも代理店があったことが示されており、OSC製の建築金物が広く日本で用いられていたことがわかる。また、具体的な納入建築物についても記載があり、OSC製の建築金物が高品質の国産品として、広く用いられたことがわかる[53]。

1. 国会議事堂
2. 明治屋ビル(東京)
3. 日本銀行(東京)
4. 軍人会館(東京)
5. 佐々木営業所(大阪)
6. 東京電燈(東京)
7. 工業大学(東京)
8. 十合百貨店(大阪)
9. 三井物産(名古屋)
10. 大日本ビール会社(東京)
11. 内務省(東京)
12. 関東軍司令長官々邸(新京)
13. 住友ビルディング(東京)
14. 目黒区役所(東京)
15. 伊勢丹百貨店(東京)
16. 明治生命(東京)
17. 小西六商店(東京)
18. 岡崎銀行(神戸)

19. 宝塚劇場(東京)
20. 大同生命(東京)
21. J.O.B.K(大阪)
22. 日比谷劇場(東京)
23. 慶應大学(東京)
24. 住友銀行(東京)
25. 株式取引所(神戸)
26. 同潤会アパート(東京)
27. 小国民道場(東京)
28. 沖電気製作所(東京)
29. 特許局(東京)
30. 朝日ビル(東京)
31. 住友銀行(横浜)
32. 博文館(東京)
33. 共同印刷(東京)
34. 大同生命(横浜)
35. 明治屋(横浜)
36. 文部省(東京)
37. 味の素ビル(東京)
38. 電報通信社(東京)
39. 株式取引所(大阪)
40. 日本郵船(横浜)
41. 某ビル
42. 海軍経理学校(東京)
43. 住友銀行(東京)
44. 大丸百貨店(大阪)
45. 地下鉄ビル(東京)
46. 日本ビルディング(東京)
47. 吉田郵便局(横浜)
48. 聖路加病院(東京)
49. 日本劇場(東京)
50. 神戸海上火災(神戸)
51. 陸軍大学(東京)
52. 電気学校(東京)
53. 水道部庁舎(大阪)  
(OSC 昭和12年、(1937年)、p.3-5)

これらに加え、1929年から1937年において、ヴォーリズ建築として、ヴォーリズが設計に関わった建築物が多くつくられており、それらにも米国サージェント製、および、OSC製の建築金物が利用されていると予想される。実際、著者が調査した中では、国会議事堂(1933年(昭和11年)完成 東京)のほか、ヴォーリズ記念館(1931年(昭和6年)完成 滋賀県)、ハイド記念館(1931年(昭和6年)完成 滋賀県)、佐藤邸(1931年(昭和6年)

完成 滋賀県)、軍人会館(現九段会館)(1934年(昭和9年)完成 東京)、神戸女学院(1934年(昭和9年)完成 兵庫県)、豊郷小学校(1937年(昭和12年)完成 滋賀県)、日本銀行旧館(1938年(昭和13年)完成 東京)に米国サージェント社製や OSC 製の建築金物が現存している。

その後、株式会社大信洋行金属部は、1945年(昭和20年)の空襲により蒲田工場の焼失に伴い、その製造を終えることになる。蒲田工場の消失については、東京工業大学名誉教授 工学博士 小林政一が『新建築金物』の序言で次のように記している。

山本氏は、言わば生粋の近江セールズ育ちである。永年 OSC 建築金物を盛り立ててきたのであったが、空襲で同社が焼失し、戦後は再起しなくなったので誠に惜しいことである。(山本貞吉、新建築金物、城南書院、2版、(1959)、序言)[54]

大信洋行としての OSC 製建築金物の製造については、建築設備研究会が 1930年から 1944年 12月まで発行していた『建築設備』に記載がある。この『建設設備』には、会員営業案内のページがあり、1944年(昭和19年)12月号に「OSC 建具金物製作販売 大信洋行東京出張所 蒲田・西六郷 2-33 電話・蒲 3434」という記述があることから、1944年 12月までは工場が存続していたことを知ることができる[55]。

ヴォーリズが設立した近江セールズによって生み出された国産建築金物 OSC は、1945年の空襲でその活動を終えることになる。日本の建築金物の国産化に大きな功績を残した OSC 製建築金物は、1929年(昭和4年)の近江セールズによる委託事業で 8年間製造され、そして、1932年(昭和7年)からの近江セールズの自社工場により 5年間製造された。さらに、1937年からの大信洋行による製造が 8年であり、計 17年間の製造であった。

以下に、ヴォーリズと国会議事堂について略年表を記載する。

1880年(明治13年)	ヴォーリズ誕生。
1902年(明治35年)	近江八幡に英語教師として赴任する。
1907年(明治40年)	建築設計監督を開業する。
1908年(明治41年)	「議院建築の方法に就いて」が発表され、国産品を採用することが表明される。
1918年(大正7年)	近江基督教慈善強化財団(近江ミッション)を開設する。
1920年(大正9年)	近江セールズを設立する。米国サージェント製の建築金物の輸入・販売を始める。 国会議事堂が着工される。
1929年(昭和4年)	OSC製の建築金物の製造を蒲田の工場に委託し、販売を始める。
1930年(昭和5年)	国会議事堂の建築金物の納入の指示を受ける。
1932年(昭和7年)	自社工場を設け、OSC製の建築金物の自社製造販売を始める。
1936年(昭和11年)	国会議事堂が完成する。
1937年(昭和12年)	建築金物工場を大信洋行に売却する。
1945年(昭和20年)	空襲により大信洋行蒲田工場が焼失する。
1980年(昭和60年)代	衆議院、参議院の錠及附属金物が新しい米国サージェント製と交換される。

## 9 まとめと今後の課題

本研究は、ウィリアム・メレル・ヴォーリズの功績について、国会議事堂の建築金物にはじまる OSC(近江セールズ株式会社)製の建築金物事業に焦点を当てて論じてきた。論じるにあたり、OSC製建築金物に関する資料および国会議事堂に関する資料を用いてヴォーリズの功績の経緯を明らかにした。また、国会議事堂における現地調査、および、衆議院事務局、参議院事務局の調査を踏まえ、実態を明らかにすることができた。

ヴォーリズは、西洋建築が増加する大正、昭和初期において、ヴォーリズ建築と呼ばれる建築物の建築だけではなく、建築金物において、近江セールズを設立することにより、米国製サージェント社製建築金物の輸入・販売、そして国産の建築金物の製造・販売という事業を行うことによって、近代化する日本において大きな功績を残したことを示すことができた。

また、新規性のある成果としては、国会議事堂への現地調査および衆議院事務局、参議院事務局による調査により、国会議事堂の建設当時の建築ものについて明らかにすることができ、また、昭和60年代の交換工事の詳細、そして、現在の国会議事堂における建築金物の状況を明らかにす

ることができたことである。

これらのことより、ウィリアム・メレル・ヴォーリズが日本の建築金物の発展において、重要な役割を担ったことを示すことができた。

しかしながら、以下のような課題を残す。

1. 日本における建築金物の歴史と OSC 製建築金物の位置づけ
2. 国会議事堂の建設において近江セールズが選定された理由に関する国会議事堂の資料
3. OSC 製建築金物が導入された建築物の調査
4. 現存する OSC 製建築金物についての調査
5. 米国サージェント社製を近江セールズが輸入・販売・製造をすることを可能とした関係性

このようにヴォーリズの功績としての建築金物については、未解決の課題が存在する。これについては、今後の調査によって明らかにしていきたい。

しかしながら、この研究で示すことができたヴォーリズの建築金物についての功績は、広く認知されるべきものであり、今後、OSC 製の建築金物、米国サージェント社製の建築金物を始め、大正から昭和初期にかけて発展した建築金物の保存のためにも今後も研究を継続させていきたい。

## 参考・引用文献

- [1] 佐々木宏、現代建築の条件、彰国社、(1973)、p.80、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/12421185> (参照 2024-11-04)
- [2] 建築と社会、日本建築協会、32(9)、(1951年9月)、p.21
- [3] 一柳米来留、失敗者の自叙伝、明文舎、(1970)
- [4] 吉田悦蔵、近江ミッション・ハンドブック草稿、近江ミッション図書、(1925)、p.11
- [5] 商業興信所 編、日本全国諸会社役員録』第29回、商業興信所、(1921)、p.245、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/936470> (参照 2024-11-04)
- [6] 吉田悦蔵、近江ミッション・ハンドブック草稿、近江ミッション図書、(1925)、p.29
- [7] 大蔵省印刷局 [編]、官報、日本マイクロ写真(1921年05月03日)、p.17、国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2954739> (参照 2024-11-04)

- [8] 近江兄弟社 60 年史(草稿)第 6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」、(1961 年着手)、p.11、これは、1961 年に近江兄弟社で作成されたものであるが、未完成、未発行のものである。この論文では、学校法人ヴォーリズ学園図書館に所蔵されているものを使用している。
- [9] 吉田悦蔵、近江の兄弟ヴォーリズ等、警醒社書店、(1923 年)、p.191、原文において「大正年( )年ごろから」の部分は空欄になっている。
- [10] 吉田悦蔵、近江ミッション・ハンドブック草稿、近江ミッション図書、(1925)、p.88
- [11] 日本工学会 編、明治工業史〔第 5〕、日本工学会、(1927)、p.752、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1836175> (参照 2024-11-04)
- [12] 帝国議会 新議事堂竣工画報、日刊土木建築資料新聞社、(1937 年)、p.99
- [13] 国立国会図書館月報、(2020 年 11 月)、国立国会図書館、p.17、「本の万華鏡」第 28 回 国会議事堂ができるまで、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/11557436> (参照 2024-11-04)
- [14] 衆議院事務局編、国会議事堂新ガイドブック：移りゆく白亜の議事堂、衆栄会、(2017)
- [15] 帝国議会 新議事堂竣工画報、日刊土木建築資料新聞社、(1937 年)、資料編
- [16] ヴォーリズ建築事務所 [作] ほか、ヴォーリズ建築事務所作品集：Their work in Japan 1908-1936、城南書院、(1937.7.)、広告、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1886001> (参照 2024-11-04)
- [17] 湖畔の声、湖声社、1 月号、(1931)、p.18
- [18] 近江兄弟社 60 年史(草稿)第 6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」、(1961 年着手)、p.8
- [19] [大蔵省]営繕管財局 編、帝国議会議事堂建築報告書〔本編〕、営繕管財局、(昭和 1938)、p.445、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1686702> (参照 2024-11-04)
- [20] 同書、p.550
- [21] 同書、p.551
- [22] 同書、p.554

- [23] 同書、p.555
- [24] 同書、p.558
- [25] 同書、p.552
- [26] 同書、p.591
- [27] 佐々木宏、現代建築の条件、彰国社、(1973) p.80、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/12421185> (参照 2024-11-04)
- [28] 山本貞吉、新建築金物、城南書院、2 版、(1959)、序言、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2491869> (参照 2024-11-04)
- [29] 同書、序言
- [30] 山本貞吉、人生問題清月夜話、力興堂(1962)、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/3449426> (参照 2024-11-04)
- [31] 同書、p.12
- [32] 同書、p.12
- [33] 山本貞吉、新建築金物、城南書院、2 版、(1959)、p.7
- [34] 近江兄弟社 60 年史(草稿)第 6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」、(1961 年着手)、p.11、原文では、「昭和 7 年(1912) 月」となっており、西暦の表記が誤っているため、「昭和 7 年(1929 年) 月」に修正している。なお、月については空欄である。
- [35] 山本貞吉、新建築金物、城南書院、2 版、(1959)、p.7
- [36] 湖畔の声、湖声社、1 月号、(1931)、p.18
- [37] 山本貞吉、新建築金物、城南書院、2 版、(1959)、p.7
- [38] 山本貞吉、人生問題清月夜話、力興堂(1962)、p.23
- [39] 同書、p.23
- [40] 鉄道技術社 編、国有鉄道資料集覧 昭和 7 年版、鉄道技術社、(1932 年)、p.98、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1688252> (参照 2024-11-04)
- [41] 衆議院事務局編、国会議事堂新ガイドブック：移りゆく白亜の議事堂、衆栄会、(2017)
- [42] 高橋真、中村好文、堀英樹、建築金物 細部に宿る住みごころ、INAX、(2002)、p.59
- [43] [大蔵省]営繕管財局 編、帝国議会議事堂建築報告書〔本編〕、営繕管財局、(昭和 1938)、p.233、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1686702> (参照 2024-11-04)
- [44] 同書、p.408
- [45] 近江兄弟社 60 年史(草稿)第 6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」、(1961 年着手)、p.8
- [46] 近江兄弟社 60 年史(草稿)第 6 分冊「昭和時代 1 昭和 1 年から 10 年」、(1961 年着手)、p.12 原文では、「昭和 8 年(1916)頃」となっており、西暦の表記が誤っているため、「昭和 8 年(1933)頃」に修正している。
- [47] 山本貞吉、新建築金物、城南書院、2 版、(1959)、p.554
- [48] 同書、p.555
- [49] 湖畔の声、湖声社、4 月号、(1937)、p.46
- [50] 湖畔の声、湖声社、3 月号、(1937)、p.19
- [51] 湖畔の声、湖声社、4 月号、(1937)、p.48
- [52] OSC 昭和 12 年、(1937 年)、p.1
- [53] 同書、p.3-5
- [54] 山本貞吉、新建築金物、城南書院、2 版、(1959)、序言
- [55] 建築設備、建築設備研究会、6(12)、(1944-12)、p.32 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1888534> (参照 2024-11-04)